

大平正芳記念財団レポート

第36回「大平正芳記念賞」・第34回「学術研究助成費」



上：細田尚美氏
下：関 智英氏

上：ワヒュ・プラセティアワン氏
下：猪俣哲史氏

上：金成隆一氏
下：伊藤泉美氏

第36回の授賞式はコロナ禍のために中止とさせていただきました。授賞者の皆様には、少し落ち着いた時期をみて、それぞれ大平正芳記念財団の事務所においていただき、理事長より、トロフィーをお渡した後授賞作品作成課程などのご苦勞などを含め懇談を行いました。

遠方であるインドネシア在住のワヒュ氏、長崎市在住の細田氏にはトロフィーをお送りし、お写真をお送りいただきました。

来年第37回の授賞式に併せて授賞式を行い、皆様にご紹介させていただきます。と考えております。

2020（令和2）年 9月発行

大平知範理事長の挨拶

本年は「第36回大平正芳記念賞」、「第34回学術研究助成費」贈呈の年に当たりましたが、思いもよらなかった災禍に見舞われ、大変残念ながら贈呈式並びに記念レセプションは、令和3年6月12日に延期せざる得ませんでした。

しかしながら授賞者の選定作業は1月15日に終了。末廣昭運営・選定委員長はじめ委員の先生方の選定作業、続く授賞者の言葉などは例年通り進んでまいりました。

また、新年会開催以降の予算書作成、それに伴う理事会、評議員会、監事会開催、同様に年度末の決算作成、役員会、内閣府への書類提出など順調に遅滞なく行うことができました。これも関係各位のご支援のよるものと心より感謝いたしております。

本年度の活動につきましては、まず1979年12月の大平訪中をきっかけに本格化する対中資金援助の実態を明らかにしたいという狙いから三名の先生方に編集制作を依頼いたしました。これまで1972年の日中国交正常化交渉につきましては、交渉の全容が明らかになっていますが、72年より79年の間は不明の点が多く、中国の西側資金の流入の脅威感、対ソ関係の悪化、文化大革命四人組による混乱の収拾、加えて問題なのは経済運営のノウハウの欠如でした。これを心配した大平は、鄧小平の部下である谷牧副首相と大来佐武郎間で経済のイロハから借款受け入れ体制の準備まで度重なる会議をアレンジさせたと聞いております。

どのような研究成果が出るか楽しみです。上海の宝山製鉄所、大同—秦皇島の石炭輸送など近代化のスピードアップ

は、中国社会主義経済興隆の起爆剤となったのは明らかで、この間の事情がもう少し明らかになればと思っております。

この出版プロジェクトは、現在コロナ禍の下、関係者のインタビューをはじめ先生間の意志疎通もままならず停滞状態にありますが、現在これに続く第二の事業がスタートしております。

岩波文庫の『雨夜譚』（洪沢栄一自伝）の中国語訳出版です。第28回大平正芳記念賞を受賞された岩波書店出身の馬場公彦氏（現北京大学外国語学院教員）よりのアプローチでスタートしております。洪沢栄一は論語研究、書道家として中国では知られているものの、肝心の「自叙伝」は訳されておらず、明治維新後を代表する経済人を紹介できる良い機会ではと考えております。

また、昨年より北京外国語大学（日本学研究センター）はじめ北京大学、清華大学より話ができました大平訪中四十周年記念事業につきましては、コロナ禍の事情で遅れており、別の機会にご報告をさせていただければと思っております。

然しながら「尖閣諸島への不法侵入」「香港の一国二制度の破棄」などを目の前に連日突き付けられておりますが、今後の中国との協力事業などをどう考えるべきか皆様からのご意見も賜ればと思っております。

2019 年度、第 36 回大平正芳記念賞の 選考結果について

運営・選定委員会委員長 末廣 昭

2019年度(令和元年)の第36回大平正芳記念賞は、自薦他薦合わせて計31点の本が寄せられ、2019年10月から2020年1月までの計4回の選定委員会における厳正な検討の結果、後述する6点(特別賞を含む)に決定した。対象地域はアジア・環太平洋、日本(横浜)、中国、フィリピン、インドネシア、アメリカの6つをカバーし、最新の経済理論を駆使したアジア経済論、横浜華僑社会の初めての通史、フィールドワークの傑作、新聞記者による渾身のルポルタージュなど、2019年度も多種多彩で水準の高い作品が揃った。一方、環太平洋学術研究助成費の方は、応募はあったものの採択にまでは至らなかった。なお、選考に携わった委員は次の6名である。

末廣昭 (委員長、学習院大学教授)、総括、東南アジア経済
青山和佳 (東京大学教授)、文化人類学、宗教社会学、東南アジア社会

金子芳樹 (獨協大学教授)、国際政治、東南アジア政治

川島真 (東京大学教授)、アジア外交、中国・台湾

木村福成 (慶應義塾大学教授)、国際経済、アジア太平洋地域の経済

久保文明 (東京大学教授)、アメリカ政治、日米関係

黒崎卓 (一橋大学教授)、開発経済学、南アジア経済

以下、授賞作6点について、その授賞理由を簡単に紹介しておきたい。

①ワヒユ・プラセティアワン (Wahyu Prasetyawan)
『NETWORKED: Business and Politics in Decentralizing
Indonesia 1998-2004』(京都大学学術出版会、2018年)

本書のサブタイトルにある「ビジネスと政治の関係」は、スハルト政権時代のインドネシアを論じる際に好んで取り上げられたテーマである。しかし、本書が扱うのはスハルト政権時代ではない。スハルト大統領を退陣に迫り、新憲法の制定と地方分権を進めていた新生インドネシアの時代が対象である。この本の特徴は、「ビジネスと政治の関係」の具体例として、東カリマンタンの石炭鉱山、西スマトラのセメント工場、リアウ州の油田の3つを取り上げ、天然資源の管理・運用をめぐる中央と地方の間の政治レントの争奪戦をビビッドに描いた点にある。スハルト政権時代は大統領と中央の権力集団がほぼ独占していた地方の天然資源の利権が、ポスト・スハルト時代にどのように変容していったのか。地方の政治リーダーのネットワークに注目しながら実証的に分析した。本書は英語で出版されたが、著者はインドネシア人である。京都大学東南アジア研究所に客員研究員として滞在し、日本人のインドネシア研究者の指導を受けつつ、自国の政治変動に関する博士論文を提出し、それをもとに英語の本として発信している点に注目した。

②猪俣哲史『グローバル・バリューチェーン 新・南北問題
へのまなざし』（日本経済新聞出版社、2019年）

本書は現代の環太平洋経済を理解するためのキーワードである「グローバル・バリューチェーン（GVC、国際的な価値の連鎖）」を軸にすえ、GVC の分析手法や付加価値貿易、国際産業連関といった最新のツールを使って、日本を含むアジア経済や米中の経済対立のダイナミックな動きを描き出す。かつて世界経済が抱えた重要な問題のひとつは、先進国（北）と開発途上国（南）の間の経済格差、つまり「南北問題」であった。ところが、経済のグローバル化と情報通信技術の発展は世界経済の構図をすっかり変える。それが、GVC や国際生産分業のもとで急速に経済力を拡大してきた新興国（や企業）の台頭であり、「新・南北問題の時代」の幕開けであった。本書は豊富な図版や統計データを読者に提供しつつ、新しい姿の環太平洋経済の実態を解き明かす。また、著者は学際的で国境を越えた GVC 研究のリーダーの一人として英語で発信を続けており、その点も今回の授賞の理由のひとつとなった。

③伊藤泉美『横浜華僑社会の形成と発展―幕末開港期から関東大震災復興期まで』（山川出版社、2018年）

日本を代表する中華街は横浜、神戸、長崎の三か所。このうち長い歴史と最大の規模を誇る横浜の華僑社会の形成と発展については、これまでまとまった本がなかった。その理

由は、関東大震災と太平洋戦争期の横浜大空襲によって、貴重な資料の大半が消失してしまったからである。本書は著者が勤務していた横浜開港資料館、横浜中華会館、そして著者自身の三者の、長期間にわたる資料の発掘調査と華僑・華人に対する聞き取り調査をもとに書き上げられた、横浜華僑社会に関する初の本格的な研究書である。1859年から1920年代半ばまでの期間を対象とし、行政機関が実施した人口・職業調査の詳細な分析は圧巻である。また、当時の街の様子を示す多数の古地図、貴重な写真、個人の家に残る文書などを組み合わせて、横浜華僑社会の実態を立体的に再構成した点は本書の大きな特徴であろう。大平正芳記念賞にふさわしい記念碑的大作である。

④関智英『対日協力者の政治構想—日中戦争とその前後』（名古屋大学出版会、2019年）

こちらも記念碑的大作と呼ぶにふさわしい研究書である。研究対象は日中戦争期に汪精衛政権や満州国などで日本側に協力した中国人たちの政治構想と活動である。対日協力者たちは、中国では国民党からも共産党からも漢奸とみなされ、民族の裏切り者として扱われてきた。同時に、日中どちらの学界でも彼らを学術的に論じることを避けてきた。この難しい対象に正面から取り組み、対日協力者一人一人の行動を丹念に追って、どのような経緯で日本に協力し、実際に何をしたのか、歴史的に掘り起こしたのが本書である。また、この本の画期的な点は、日中戦争期だけでなく、太平洋戦争

が終わって以後の「対日協力者の戦後」についても、可能な限りその足跡を追っている点である。本書は日中間に横たわる「歴史認識問題」を考える上でも重要な一書であり、対日協力者研究の現段階における最高水準を示す研究書であると評価した。

⑤細田尚美『幸運を探すフィリピンの移民たち—冒険・犠牲・祝福の民族誌』（明石書店、2019年）

本書は文化人類学を専攻する研究者のフィリピンでの現地参与調査（聞き取り調査）の傑作である。一読すれば分かるように、本書は堅苦しい学術書ではなく、一般の読者も引き込まれる創造性とウィットにあふれた作品である。フィリピン人は国内、国外問わず「移動する民」である。通説によれば、移動する民は貧しいがゆえに村を離れ、マニラ首都圏や海外に出稼ぎにでて仕事を探し、村に残した家族や親族に送金する。本書はそうした貧しさゆえの出稼ぎといった通説のイメージを一新する。キーワードは著者が何度も足を運んで聞き取り調査を行った東ビサヤ地方の言葉でいう「サパララン」である。日本語に近いニュアンスは未知の世界への冒険である。このサパラランの言葉を導きの糸に、そして、親族関係（人とのつながり）と宗教実践（神とのつながり）を分析の視点にすえて、移動する民の暮らしと心の内面を丁寧に描き出す。従来型のモノグラフ・タイプの研究ではなく、人の生き方をどうとらえたらよいのかという普遍的な問いを念頭に置いた、チャレンジ精神に満ちた新しい民族

誌である。選定委員会はその試みを高く評価した。

⑥金成隆一『ルポ・トランプ王国—もう一つのアメリカを行く』『ルポ・トランプ王国2—ラストベルト再訪』(岩波新書、2018年、2019年)。

2016年末のアメリカ大統領選挙におけるトランプの勝利は、世界中に大きな衝撃を与えた。選挙前の予想をくつがえすトランプ大統領の誕生は、病めるアメリカの実態を伝えると同時に、日本メディアのアメリカ報道の問題点、つまり東海岸と西海岸のニュースにもっぱら集中してきた報道の一面性を明らかにする契機にもなった。とくに、大統領選で分かれ目になったといわれるオハイオ州、ペンシルヴァニア州などのいわゆる「ラストベルト」の選挙民の生の声、都市と地方に挟まれた郊外に住む人々の声、国際紛争の戦場に駆り出され、心の傷を負った退役軍人たちの声、共和党が強い最南部のバイブルベルトの選挙民の声など、これまで日本には伝わってこなかった「もう一つのアメリカ」の姿が、新聞記者である著者の臨場感あふれる記述で次々と描かれていく。学術書ではないため特別賞の扱いとなっているが、現代のアメリカを理解する上で研究書に劣らぬ貴重な貢献である。大平正芳記念賞では、新書を中心に、環太平洋連帯に寄与する一般書についても積極的に顕彰していきたいと考えている。

受賞の言葉

〔大平正芳記念賞〕

受賞作

『NETWORKED: Business and Politics in
Decentralizing Indonesia 1998－2004』

ワ ヒ ユ プ ラ セ テ ィ ア ワ ン

Wahyu Prasetyawan

(シャリフ・ヒダヤツツラ・イスラミック・国立大学教授)

大平正芳記念賞を受賞できて大変光栄に思います。財団の理事の皆様と選考委員会に心より感謝申し上げます。

インドネシアの政治経済に関する従来の評論とは異なり、著書「ネットワーク：インドネシアの地方分権におけるビジネスと政治、1998-2004年」では中央政府と地方自治体の政治家間のネットワーク、繋がりが、1998年に「新秩序」政府が崩壊した後、地方分権が進むインドネシアにおいては、ますます顕著な役割を果たしている」と論じています。この本では、政治的ネットワークについてと、それらが特定の機関でどのように規制され、運用されているかを説明しています。この本は、なぜインドネシアの政治経済がネットワーク分析の枠組みでより良く説明されるのか、問います。

インドネシアの政治についての従来の評論では、政治家間の繋がりと、重要な現象を見落としています。1998年にインドネシアでスハルトが失脚した後、B.J. ハビビーの新政府は、中央政府と地方自治体の関係を劇的に変える地方分権政策を導入しました。

地方分権の下で、地方自治体は、天然資源の管理とこれらの資源からの収益のより公平な配分をめぐって、中央政府との間で官僚、政治家による対決に乗り出しました。地方のエリート達は、経済・政治機関の形成へのより大きな関与を要求したのです。

地方分権は、過去30年間のインドネシアで最も重要な政治経済発展の一つです。この本では中央政府、地方自治体、多

国籍企業をまきこんだ根深い政治的対立と駆け引き」の3つのケース（東カリマンタン、西スマトラ、リアウの州）を検討します。

この本は、インドネシアの広大な天然資源を管理し、制御するための競争がもはや国家レベルの関係者に限定されず、地方レベルだけでも制限されないことを示しています。この研究は、天然資源の管理をめぐる中央政府との紛争において地方の活動主体が深く関わった結果、国家政治経済の構造が変化したことを明らかにします。これらの変化は、天然資源収益の配分の新しいパターンを意味し、インドネシアにおける民主的政治と政治形態の進化を示唆しています。

この授賞によって、政治経済とネットワーク、そしてそれらが地域の他の国々とどのように関わるかについて、さらなる研究に取り組むよう、大いに励まされます。この研究を通じて、ネットワークの分析解明への理解が深まることにより、協力が促進され、環太平洋地域の強靱な一体感の形成に寄与することを期待しています。

最後になりますが、恩師である白石隆先生、同僚、出版社、友人、家族、私に対して様々な支援と励ましを与えてくれたインドネシアの皆さんに感謝します。

受賞作

『グローバル・バリューチェーン

新・南北問題へのまなざし』

いのまた さとし
猪俣 哲史

（ジェトロ・アジア経済研究所 上席主任調査研究員）

このたびは大変栄誉ある大平正芳記念賞を頂戴いたしまして誠に光栄に存じます。この本を出すまで賞というものに余り縁のない人生を送って参りましたので、やはり、こういった形で評価を得られるのは本当に嬉しいことだと実感しております。この晴れがましい機会を設けてくださった

財団関係者の皆さま、そして私の本をこの場に加えてくださった運営・選定委員の諸先生に厚くお礼申し上げます。

さて、経済のグローバル化という現象については、分野を問わず多くの研究者が早期から着眼し、それぞれ独自の問題意識と分析手法をもって解明に努めてきました。これに対し、本書のタイトルである「グローバル・バリューチェーン (GVC)」、あまり聞きなれない言葉ではないかと思います。実際、この言葉が世に出たのはほんの十数年前のことであり、特に日本では未だ市民権を得ておりません。

しかし今日、我々を取り巻く環境は急速に変化しており、この新たな概念が世界的な関心を呼び寄せています。米中対立、地球温暖化、貧困問題、そして現在進行形で世界を脅かしているパンデミックなど、多くの現代的課題を GVC の視点で捉えることができるからです。

GVC 研究は、経済学、政治学、社会学、経営学、統計学など多様な学問の統合知です。こういった学際性こそ GVC 研究の特徴とも言えますが、一方で、その分野横断的な内容から研究の輪郭が掴みにくいというのも事実です。そこで、今でも様々な方向へ展開を続ける知のベクトルを、何とか整理して一枚の絵の中に収めたい……本書はまさに、筆者の斯様な熱情と無謀な動機の産物と言えます。

「バリューチェーン」とは、字義通り、価値を取り結ぶ鎖という意味です。私の研究も然り。多くの研究者の価値ある知見を一つ一つ紡いだのがこの本です。そして何よりも、編集を手掛けてくださった日経BP社平井修一氏のご尽力なくしては、この本が形になることはありませんでした。格別の感謝を捧げたいと思います。

受賞作

『横浜華僑社会の形成と発展—
幕末開港期から関東大震災復興期まで』

いとう いずみ
伊藤 泉美

(横浜ユーラシア文化館副館長・主任学芸員)

この度、拙著『横浜華僑社会の形成と発展—幕末開港期から関東大震災復興期まで』が、第36回大平正芳記念賞を授与されました。誠に光栄に存じ、大平正芳記念財団の方々をはじめ、関係各位に心より御礼申し上げます。

この本のテーマ、横浜華僑社会の歴史は、私が長年研究に取り組んできたテーマです。1985年、大学院に進んで修論のテーマに悩んでいた折、横浜中華街を歩きながら、ふと、この街は一体いつごろからあるのだろう、という疑問がわいてきました。横浜生まれゆえ、中華街は身近な存在でしたが、不覚にもこの街の歴史に思いを寄せてきませんでした。調べ始めると、観光地としての横浜中華街は有名ですが、その歴史についてはほとんど明らかにされていませんでした。横浜の対外関係の歴史研究はペリー来航に始まる欧米関係の研究ばかりでした。しかし、日本は欧米5か国と条約を結び開国したのですが、やってきた外国人の大半は中国人でした。ならば、中国人の足跡を明らかにしなければ、横浜の近現代の真の姿に近づけません。

以来、前職横浜開港資料館で横浜華僑に関わる歴史資料を調査研究収集し、横浜中華街の歴史に関する企画展を開催しました。その間、多くの横浜華僑華人の皆さまの知己をえて、ともに調査研究を進め、その時々文章にしていきました。今回の本はそれらを土台とした一冊です。

さて、2020年の春、日本は、世界は、新型コロナウイルスの脅威の只中にあります。横浜中華街も大打撃を受けています。休業による経済的損益に加えて、「中国に帰れ」などいうヘイトの声も寄せられています。このことに私は強い憤りを感じ、また自分の至らなさを痛感しています。横浜中華街は開港以来160年の歳月をへた街であり、横浜華僑華人の

多くは、横浜を故郷とする人びとなのです。今回の受賞を契機に、さらに横浜華僑華人の歴史研究とその普及に邁進し、多文化共存社会の実現に努力してまいる所存です。最後となりましたが、本書を世に送り出してくださった山川出版社、ご指導いただいた恩師、また日々私を支えてくれる家族にこの場を借りて感謝の意を表します。

受賞作

『対日協力者の政治構想－ 日中戦争とその前後』

せき ともひで
関 智英

(津田塾大学文学部准教授)

このたびは、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、誠に光栄に存じます。財団関係者の皆様、選定委員の先生方、本書執筆にあたり数々のご支援を下さった方々に、心より御礼を申し上げます。

本書『対日協力者の政治構想』は、日中戦争時期に日本に協力した中国人の動向に注目したものです。ご承知のように大平正芳先生は1939年から40年にかけて張家口の興亜院蒙疆連絡部に勤務されました。まさに本書が取り上げた対日協力者と実際に関わりを持っていらしたのです。本書がそのような経歴をお持ちの大平先生ゆかりの賞をいただくことができたことに、得も言われぬ感慨を覚えます。

日中戦争時期、対日協力者は蒋介石や毛沢東など日本と戦った側から「漢奸」すなわち「漢民族の叛逆者」として批判されてきました。この評価は戦後も続きました。これには大陸の中華人民共和国および台湾の中華民国双方が、日中戦争勝利をもって、自らの正統性の根拠としてきたことが影響しています。このため研究の世界でも、対日協力者については「叛逆者」としての評価が先行し、それを乗り越える検討はほとんどなされてこなかったのです。

しかし実際には日本占領地もまた日中戦争の無視できない構成要素でした。また重要なのは協力者が日本と協力した段階では、日中戦争の見通しが、日本が勝利する可能性も含めて不透明だったということです。日本との協力を前提として中国の将来を構想した対日協力者の判断も、それなりに合理的なものであったと言えるのです。

では日本と協力した中国人は、日中戦争をどのように考え、中国の将来を如何に構想していたのでしょうか。本書では日中戦争勃発前夜から中国に存在した様々な政権の変遷を軸に、様々な対日協力者の主体性に着目し、戦後にまで繋がるその活動に迫りました。これにより、「叛逆者」という理解だけでは到底見えてこない協力者の主体性を跡付け、また日中戦争を東アジア史の中でより立体的に捉えることが出来たのです。

今後も大平賞の受賞に恥じぬよう、日中関係の理解に資する研究に精進する所存です。

受賞作

『幸運を探すフィリピンの移民たちー 冒険・犠牲・祝福の民族誌』

ほそだ なおみ
細田 尚美

(長崎大学多文化社会学部准教授)

このたびは、大変名誉な大平正芳記念賞をいただき、誠に光栄に存じます。

私は、世界各地に働きに出ているフィリピンの人たちの「移動すること」に対する思いをより深く知りたいという気持ちから博士論文の研究を始め、それが本書の基となりました。フィリピンの移民現象は経済格差、強固な家族ネットワーク、高い英語力などといった要因で説明される傾向があります。そうした外から見て分かりやすい要因だけでなく、かれらを外界へと突き動かす、地域の文化的な原動力のよう

なものがあれば、それは何かという視点に立って、フィリピン移民の生きる日常の世界を探っていきました。そうして
いるうちに、かれらは、本書のタイトルになっている「幸運」
を探しているのではないかという考えが浮かびました。本
書ではこの考えを軸に、フィリピン中部のサマル島にある
一農漁村とその村のマニラ分村を主たるフィールドとして、
地域の歴史、生業、空間認識、ライフコース、信仰実践、親族関
係、世代や階層の差などの側面と、それらが相互に関連して
いる様子を丹念に描きました。本書を通じて、読者の方々が
フィリピンを含む世界各国の移民の人たちが生きる世界に
関心を持ち、移民の方々の何気ない一言や行いの背景を理解
したいと思うきっかけになれば幸いと考えています。

世界では現在、国境を越えた人の動きが年々加速する一方、
受け入れ国側では移民・難民の排斥の風潮が高まりをみせる
気配があります。このような時代に、太平洋圏の協力関係強
化を提唱した大平正芳元首相の記念賞を受けたことは望外
の喜びです。拙著を選んでくださった貴財団の選定委員の皆
様、ならびに関係者の皆様、さらに本書が出版されるまでの長
い間にお力添えをくださった全ての方々に深く感謝申し上げ
ます。このたびの受賞を励みとし、今後さらにフィリピン
研究ならびに移民研究の発展に寄与できればと思います。

受賞作

『ルポ・トランプ王国－

もう一つのアメリカに行く』

『ルポ・トランプ王国2－ラストベルト再訪』

かなり りゅういち
金成 隆一

(朝日新聞社経済部記者)

優れた学術研究の著作に混じって、大平正芳記念賞特別賞
を賜り、光栄に存じます。運営委員、選定委員、財団関係者の
皆様に御礼申し上げます。また、アメリカ取材の機会を与え

てくれた朝日新聞社、書籍の執筆機会を与えてくれた岩波書店の皆様にも感謝いたします。

受賞作はいずれも、米大統領トランプや上院議員サンダースら「アウトサイダー」に投票した人々への取材を通して、米社会の現在地を伝えようと試みた作品です。取材は2015～19年の約3年半です。

「日本の新聞記者がここで何してるの?」「冗談でしょ? マンハッタンから車で来たの?」「オレの高卒後の人生に興味があるって?」「トランプ支持の理由を聞きたい? オレに?」

取材相手の反応はこんな具合です。多くは喜んでくれていました。私が録音機を回し、ノートも広げると、「彼は本気だ」と伝わるのでしょうか。まじめに語ってくれました。自らの境遇や思いを語ることに慣れていない人々。脱線を繰り返しながら取材が2時間を超えたことも少なくありません。米国で読まれることもない海外記者を相手に丁寧に応じてくれました。感謝するばかりです。

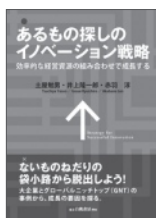
主な取材の舞台は、鉄鋼や石炭などの主要産業が廃れた「ラストベルト」と「アパラチア地方」。ダイナーやバー、選挙集会で居合わせた人々に声を掛けました。自分たちが暮らすのは「飛行機で通過される州 (flyover states)」という表現を繰り返し聞きました。グローバル化が進む中で、海外も含めて都市間の移動は活発なようだけど、自分たちの町には誰も来ない、見向きもされない。そんなニュアンスです。

記者16～19年目の作品です。これまでも市井の人々を通して時代を描くことを試みてきました。静岡では日系南米人の労働者。大阪では長距離トラック運転手、ホストクラブに通う少女、無料オンライン講座で学んでチャンスをつかむ人々、中年ひきこもりの子と同居する親。同じ手法で臨んだ米国取材でした。

日々のルーティンとは別に、自分で中長期のテーマを設定し、少しずつ当事者取材を深める手法が認められたと勝手に励まされております。今後も続けます。

風信・来信

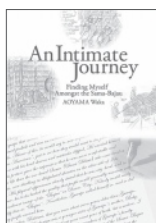
●赤羽淳・土屋勉男・井上隆一郎共著『あるもの探しのイノベーション戦略』白桃書房、2019年



本書は、大企業の成功・失敗事例も整理しながら、「研究開発型グローバルニッチトップ (GNT)」、すなわち規模は小さいながらも研究開発に積極的に取り組み、世界で大きなシェアを持つ企業9つの事例を分析、効率の良いイノベーションのコンセプトを探索してい

る。その結果、内外資源の連結、内々資源の連携、という2つの経済性を有効活用し、その実行に向けた8つの成功要因を提案する。大学での教科書も想定した書きぶり、実務家にも読みやすい。(赤羽淳・中央大学経済学部教授、第31回受賞者)

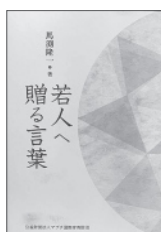
●青山和佳著『An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau.』Kyoto University Press + Trans Pacific Press、2020年



西洋的な近代科学の知は、インテグリーティー指向性の自己を暗黙の前提としている。他者を観察し、他者から距離をとり、他者の痛みに共感してもそれを自らの痛みと混同することはない。これにたいして、本書は、他者に関与し、他者の一部をとり入れ、その痛み

を分有しながら、互いの変容を遂げるというもうひとつの知の形式を提案する。著者はフィリピンのサマ・バジャウの「インティマシーの民族誌」を通じ、そのような魅力的な旅に読者を誘う。(青山和佳・東京大学教授、第23回受賞者・選定委員)

●馬淵隆一著『若人へ贈る言葉』(公財)マブチ国際育英財団、2020年



当財団元理事の馬淵隆一氏(マブチモーター株式会社名誉会長)は公益財団法人マブチ国際育英財団の創設者。いままで奨学生が社会人となるに際して、講演を通して氏の幅

広い経験から様々なアドバイスをされてきた。設立10周年を記念してその講演集が財団より発行された。

●渋沢栄一自伝『雨夜譚』（岩波文庫）が来年日本学術書翻訳事業で中国版発刊

第28回大平正芳記念賞受賞者の馬場公彦氏が北京大学に教員として赴任され学生たちと渋沢栄一自伝『雨夜譚』を中国語に翻訳している。その本が北京日本学術研究センターと財団の日本学術名著翻訳の共同事業として来年に発刊される予定。



来年はNHK大河ドラマでは渋沢栄一が主人公となり、2024年には渋沢の肖像の新一万円札が発行される。中国では渋沢栄一の『論語と算盤』はいくつもの翻訳書が出ており、知名度は高いので、この自伝はきっと歓迎されることと思われる。

●清華大学の李延江教授、大平正芳記念館来館

大平正芳訪中40周年企画を来年はぜひ行いたいと、その準備のため中国・清華大学の李延江教授、黄寅總先生が大平正芳記念館を見学された。

企画展の展示計画の検討のためで、8月7・8日両日熱心に取材され、いくつの展示物の貸し出しも要請された。

●大平正芳記念財団へのご寄付者名

【150万円】三木証券(株)(鈴木崇様)、【100万円】(株)桃李(齊田晴一様)、(株)アリエ(石橋奈央子様)、(株)イー・サポート(坂川嘉治様)、大平裕様、【50万円】(株)タカ・コーポレーション(馬淵喬様)、鈴木岩男様、【10万円】丸善工業(株)(三谷朋幹様)、シナリー(株)(清水明弘様)、鈴与(株)(鈴木與平様)、(株)ビューティビジネス(雨宮愼一様)、この他187名の個人・団体の方々より御芳志をいただきました。(順不同、2019年9月～2020年8月)



「大平正芳記念財団レポート」第38号
発行・公益財団法人大平正芳記念財団
発行人・大平 知範

2020（令和2）年9月発行

〒102-0082 東京都千代田区一番町10番地 相模屋第二ビル5階
電話 (03) 3230 - 2213 FAX. (03) 3230 - 2214
URL : <http://www.ohira.org/>

THE MASAYOSHI OHIRA MEMORIAL FOUNDATION

Sagamiya_Dai 2 Bldg. 5F
10, Ichibancho, Chiyoda-Ku, Tokyo,
102-0082 JAPAN
Tel. +81(Japan)3-3230-2213
Fax. +81(Japan)3-3230-2214
URL:<http://www.ohira.org/>